



TITLE:

動物界の道德 (特別號)

AUTHOR(S):

川村, 多實二

CITATION:

川村, 多實二. 動物界の道德 (特別號). 經濟論叢 1928, 26(1): 56-83

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128784>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 一 號 第 二 十 六 卷

昭和三年一月一日發行

特 別 號

法人に關する重複課税の問題 . . . 法學博士 神戸 正雄

ハイデッガーの關心論 . . . 文學博士 米田庄太郎

動物界の道德 . . . 理學士 川村多實二

長崎貿易に於ける銅及銀の支那輸出に就いて . . . 文學博士 矢野 仁一

型について . . . 法學士 恒藤 恭

アダム「富國民論」の研究對象并に方法の基本的考察 . . . 法學士 石川 興二

奥羽諸藩における赤子養育仕法 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

自作農地の創設及維持 . . . 法學博士 河田 嗣郎

專賣類似の仕法に基く百姓一揆 . . . 經濟學士 黒 正 巖

動物界の道徳

川村多實二

一 論斷資料の吟味

世人はよく執拗とか慘忍とかの譬喩に野生の動物を引き、猛獸毒蛇といへば陰險で貪慾飽くことを知らぬもの、嫉妬心の塊であると考へる。時には又正反對に、禽獸蟲魚の世界に人間以上の徳義禮讓の行はるゝやうにも云ふ。即ち東洋では鳩の三枝の禮、鳥の反哺の孝、西洋では蜜蜂の勤勉若しくは馬犬の舊主を忘れぬ信義などを以て、兒童教育の訓話として居ること、人の知る通りである。然し、不幸にしてかういふ話の大多數は、吾々が動物學上から此問題を論議せんとする際に、殆ど何等の價值を有たないものである。文藝作家の誇張に満ちた作り話や、無暗に詩的空想を交へた御伽話の類は固より論外であるが、今まで専門の動物學者によつて眞面目に蒐集せられたる材料であつても、大抵の場合矢張その通りである。何故なれば、それ等の話の根柢に於て、動物心理學上の大なる誤謬があるからである。詳言すれば、その話が、人間よりも遙かに劣等なる腦髓を有し、到底理非善惡の判斷が出来ない動物に對して、初から人間と同等若しくはよ

り以上の感情記憶思考等の力を肯定してかゝつて居る點が不都合なのである。

前世紀の中頃には既に人體の生理學も餘程進歩して居り、神經中樞たる腦脊髓の官能も可なり詳しく諒解せられてあつた。今日となつては、吾々の精神現象の内、如何なるものが腦髓中の何處にその中樞を有つか、何處の部位が傷けられ又は發育不良である場合に、心理上何程の缺陷を有つかといふやうな事は、もはや醫學者心理學者が相當精確に判定し得るところである。他方に於てはまた、動物界の高下等の諸綱目に亘つて神經系統の形態組織等を研究する比較解剖學もかなりの進歩を遂げて居り、牛馬なれば何の位、蛙や魚なれば何の位に發達した腦髓を有つかは、少しくその方面の書物を參照すれば、苦もなく學ぶことが出来る有様である。夫れ故、必ずしも特に動物の心理作用を研究する所謂動物心理學（之は比較心理學といひ最近に到りて急足の進歩をなしつゝある學科である）の知識を待つまでもなく、右の人類心理學と比較解剖學とから推定しても、下等の動物が決して吾々人類の有つ如き精神作用を賦與せられて居ないことが明瞭となる筈であるが、動物學者中此の點に考慮を廻らす者が少く、神經系統の構造を記す時と、その動物の精神作用を述べる時と全く別人の觀がある。即ちアメーバの如き最下等の動物にも寒熱を覺る力があり、昆蟲や蜘蛛に喜怒哀樂は勿論、苦痛煩悶、若しくは期待希望等の心理作用を肯定して、毫も怪まない。我邦でも近頃學術雜誌に載せられるフアーブルもどきの昆蟲生活の記事等

に其好例を認め得る。現代の學者でさへ此通りであるから、今より數十年前に書かれたる書物の内容が如何に此意味に於て正鵠を失したる觀察を交ふるかは、敢て論を俟たないことである。タウインやハックスレーの如き最も眞摯丁寧なる研究者でさへも、過つて蟻や蜂が人間以上の賢さを持つと考へたのは時代の然らしむる所とはいへ、今より顧みて寧ろ奇異に感ずる程に、大なる誤である。私は曾て本誌上でクロボトキンの相互扶助論が斯様なる記事に富むことを指摘したことがある。

抑も話といふものは、一人から他人へと順次傳はり行く間に少しづゝ間違つて行くのが常である。また、實地を目撃した本人の説明でも必ずしも正しいとは限らぬ。自分の飼犬などであれば兎角よき方に解釋するのが人情で、不知不識の間に「買ひ被り」をやる。其他その動物が過去に於て果して如何なる經驗をしたかを知らずして現在を見ることなども、誤謬の可能性を強くするものである。配偶者の死を悲むのあまり食を絶つて殉死した鸚鵡の話があるが、實は兩者同時に罹病し、一は急死し、他は食慾不振を續けて除々に死したのかも知れぬ。又曾て主人に従つて接骨醫の治療室を見たことのある犬が、足を折つた朋輩の犬を案内して其醫者の處へ連れて來た話、一度溺死せんとする小兒を救つた犬が、褒美に甘いものを貰つたのに味をしめて、次回には川岸に立つ小兒を川へ押し落した話、其他之に類する傳説も、右の理由から少しく割引して聞けば、

何でも無い偶然の出来事をば人間界にありさうな順序に接ぎ合せて出来上つた疑がある。結局斯うして話の出處なり構成なりを嚴密に吟味し、少しでも疑はしいものを除外するにせば、從來諸種の動物が爲したと傳へられる善惡の行爲の實例中、眞に學問上の價值を認めて可いものが極々稀となるのである。

二 道德的批判の不可能

吾人人類は朝起きてより夜眠るまで體の周圍に起つた多くのことを覺知して居り、一舉手一投足皆自己の意志で爲すのである。然し、體中にはなほ内臓の運動の如く吾人の意識範圍外の出来事が少くない。ブランコに乗る人を傍觀する者は無意識に體を振つてゐる。かくの如く吾人の如き高等なる動物の動作であつても、無意識なる行動が澤山に交つてゐるのであるから、大抵の行動を反射的になしつゝある下等動物には、一層かゝる無意識行動を交ふる割合が多い筈である。

解剖學上からいつても、意識の中樞を藏する大腦半球又は之に相當すると認めらるゝ昆蟲類の輩形體の如きものが神經中樞内に發達して居ない以上、其行動は殆んど無意識的であると斷定するの外はない。假りに吾人の知らぬ處に高等動物の大腦に相當する或器官があるとしても、明瞭にその部位が見つからぬ様ではその官能たるや實に知れたものである。元來意識なるものは、智能

に依頼して行動する動物が少しなりとも過去に於ける自體中の出來事を記録して後の參考とせんが爲めに必要なことで、單に天賦の本能によつて運動し、營巢し、又は産卵する場合には何等の効益の無いことである。蠶が自ら絲を吐いて繭を作る煩勞を知覺することは不必要であつて、意識の高級中樞に何等の交渉なく唯反射的に之をやつてしまつて毫も差支ない。事實その通りになつてゐる。敵を螫すのは蜂の意志ではなくて唯蜂の尻のする反射であり、腦髓のある頭部を切り去つた蜂の尻がなほ螫す力を以て居る。

鳥獸の如き高等なる脊椎動物でも、その智慧は案外に貧弱なる場合が多い。鶏が硝子の卵を温めることや、熊の子が揉皮になつた親の毛皮にもつれて離れなかつた實例などを見ても、彼等が頗る鈍であることが解る。通常鳥獸が非常に伶俐に思はれる場合は、其實眼耳鼻等が人間に比して著るしく鋭敏なることによるので、大腦の働となれば、犬や猫獸の如きものでも、人間の低能兒位に低能なるものである。世人が猿が人の眞似をすると思つて居るが、眞似をするには相當に進んだ推理力を必要とする。即ち人間として見せたことを前後連絡して諒解することを要するが、類人猿を除いては、それが缺けて居るから、動物には推理的模倣は出來ぬ。出來るものは唯反射的模倣（一羽の雛が水を飲めば後に續く雛が皆水を飲み、鸚鵡や九官鳥が人聲を眞似る如き）のみである。右の鶏や熊の子の場合も亦單に反射的行動に過ぎない。

之を要するに下等動物の行動は大部分無意識的に爲さるゝことであり、高等動物の場合は意識的としても高々正當なる理性を缺く低能者の行爲である。私は法理上のことは知らぬが、所謂心神喪失者や低能兒の犯罪は罰せられないのと同様に、動物の行動を吾人の道德律を以て批判することは不可能である。寄生生活は卑劣だとか、掠奪（私は曾て本誌上に盜賊鷗や奴隸使用蟻の例を舉げた）は不都合だとか咎め立てしても少しも意味をなさぬ。人間ならば德行といふべき行爲の場合と雖も全く同一で、特に賞むるに及ばぬことになる。兒童の訓話としてならば別問題であるが眞の學理上の議論として此點を一應明にして置く必要があるから、豫め一言したわけである。

三 動物相互の利害關係

諸動物の行動に善惡を云々することの無價値な事は前節に述べた通りであるが、然し地球上の動物はすべて各自個々に他動物と没交渉に生活してゐるわけでないから、甲乙の間に利害相反し、一が他に迷惑を及ぼしてゐる場合もあれば、また反對に、生命の犠牲とかかなりの勞力とかを仲間の生存のために提供してゐる場合もあり、從來動物の犯罪德行として集められてゐるものゝ大部分は、即ち之に屬するのである。次にその數例を舉げて見やう。

吾々は動物が植物を食ふ場合には一向罪惡視せぬが、動物が動物を食ふ場合は多少なりとも善くないことの様に言ふ。佛教國では一層その考へ方が強いかも知れぬ。實に人間は得手勝手なもので、栽培食物の害蟲であれば之を惡み、その害蟲の敵であれば有益動物として歡迎するのであるから、人間のいふ利害は批判の標準にも何にもなるものではない。

食肉性動物にあつては、他動物を屠つて食ふことが、自然より運命づけられたる生活方法で、彼等は殺すか餓ゆるか二途その一を選ばねばならぬ。掠奪も寄生も皆その動物に與へられたる生活方法であるが、相手に及ばす迷惑には種々の程度がある。蟻の巢の中にはその蟻の同一の體臭を放つことによつて勞蟻に養はせ、遊んで居る食客の昆蟲が澤山ある。然し中にはアリマキの如く蟻と利益を交換して居る共生者も無いではない。ヂストマ、サナダムシ、若しくは諸種の病原性微生物でも、吾々は日常之に苦しめられ、極度に之を厄介視してゐるが、然し吾人の腸内には蛋白質を分解して消化吸収を助ける最も有用なる細菌が寄生して居り、吾々と此細菌とは共生生活をなし居ると認めて不可なき有様である。クロボトキンが書いたやうな皮相的な相互扶助論でゆけば、共生生活は大層好ましいことで、寄生生活は甚だ良くないことになるが、然し兩者は動物生態學上同一のカテゴリーに編入すべき引續の事實である。勿論寄生の場合には、恰かも捕へて喰ふ動物と捕へられて喰はるゝ動物との關係の如く、一方は利得をし他方は迷惑をするばかり

で、片手落、不公平な生活法であるが、自然進化の成行として斯様な關係が出来たのである。

之も亦廣義の寄生生活の中ではあるが、親が其子の生育に盡力する代りに其勞を他の動物に依頼することがある。例へば胡蜂には他の昆蟲の幼期を見つけてその腹部にある神經節を螫して運動不能に陥らしめ置き、その體中に産卵する。此卵から孵化した胡蜂の幼蟲が、宿主たる幼蟲の肉を喰つて生長するのである。東半球のホトトギス類は自ら卵を温めたり雛を養つたりすることせず、日本のホトトギスなればウグヒスやミンササエの巢を探して、その中に自分の卵を一巢に一個づゝ嘴で啣へて投げ入れる。繼母に抱かれて孵化したホトトギスの雛は運ばれし餌を獨占せんがために、實子たる雛又はその未だ孵化せざる卵をば巧に巢の外に押し出して棄てる本能を有つて居る。我子を殺されたとも知らぬウグヒス等は、自分の雛の時と同様に一生懸命に餌を運んで繼子を養ふ。鳥の中でも特別に小形なウグヒスやミンササエが、可なり大きなホトトギスの雛を養つて餓えさせないためには、非常なる勞力を以て餌を運ばねばならぬが、始終熱心に之を續けて無事にホトトギスを巢立させる有様、見るものをして實にいちらしさの感に堪へざらむる。此事實はよくホトトギスの狡猾とウグヒス等の愚直とを比較する例話と爲され、動物界の道德を集めた書中には、殆んど缺かさず掲げられてあるが、然し之に善惡は勿論賢愚を云ふことも誤である。ウグヒス等が馬鹿で、似もつかぬ我子とホトトギスの子どもの鑑別が出来ぬために、間

達へて育てるといふのではない。自然進化の成行として、ホトトギスの雛が繼母に與へる戟刺が、反射的に彼等の育雛本能を出發せしむる仕組になつて居るのである。

四 群棲に必要な本能

人々は、生物體中の細胞組織又は器官が相互連絡して調和を保つ場合をば、別段道德として推賞しやうとしないのに、群集性動物又は社會生活を爲す動物の協同的本能を實に模範的な行爲として讃嘆する。然し、之は結局同一のカテゴリーに入るべきもので、生物界に始終一貫して居る現象の一に外ならぬのである。

狼やハイエナの類は獲物を狩るに數匹乃至數十匹協同して動作することが多い。羚羊や、牛鹿斑馬の如き有蹄類或は鴝雁の如き鳥類には多數が一群をなして行動することが普通であるが、群中の如何なる弱者劣者と雖も洩れなく食餌の分配を受けてゐる。子持の者が其群中に交つて我子を育てるに聊かの不便を感じない。而して全員は指揮官たる一匹の指導の下に絶對服従を爲すのである。群中にはまた一二匹の番兵があつて、全員が食物を攝りつゝある間、外敵の警戒に任じてゐる。(註、動物の行動を記述しやうとすれば文句の意味が恰かも有意識的知能に爲しつゝある如くに取れ易いが、それは私の本意でない。意識といふ事を問題外として客觀的に行動を記述

するのであるが、文字がこれより外に無いのである。之は此處ばかりでなく本稿の各所に於て同様である。象の群中にある幼者は我母ばかりでなく、いつれの母からでも乳を貰ふといふことである。アホウドリの雛は屢多數の親から餌を貰ふ。最後の場合は友人頼山徳太郎氏はアホウドリには育たぬ雛が多くて、子を失つた母が澤山出来ることによると説明せられたが、前の場合は群棲に適應して發達した正常の習性であらう。

社會生活を營む昆蟲には、もつと適切なる自己犠牲がある。例へば蜜蜂や蟻の完全なる分業が好例である。中空なる植物の莖の中に棲む一種の蟻の社會に、その出入口たる小孔を守る役目の職蟻があるが、彼の頭部は扁平で、前面が植物の外面に酷似した色彩をもち、彼が此部分を出入口の孔に嵌めて居るときには、一見孔の位置が莖の他の部分と見分け難きやうになつて居る。つまり、此職蟻は始終門の扉の役目をする者で、仲間が來て合圖をすれば開いて通らせ、左もなきときには閉塞して何者をも侵入せしめないものである。

右のやうな本能は總て群棲に必要な習性として進化し來つたもので、恰かも子に對する親の努力や異性との合一手段が生物界に出現したと同様、合目的性の一方面への發露である。然し若し之を人間の「善行」に譬へるならば、同じ原則が却て「罪惡」を爲さしめることもある。例へば（曾て本誌で舉げた例であるが）移動に際し足手纏となる老者病者を遺棄し若しくは殺す本能が放

浪性の群集動物數種に見られる。蜜蜂が時に雄蜂や王蜂を殺すのも亦その社會全體のために有利なる「惡行」である。總て是等の習性はその動物が他のあらゆる動物に對する生存競争に負けないやうに、而してその種の子孫繁榮を有利にするために、獲たる適應性本能であるから、客觀的に評する如くに善でも惡でもない。唯自然進化によつて振りあてられた役割に過ぎぬ。

五 生活心要の範圍を超へたる「惡行」

次に私は幾らか惡事らしい惡事（若し人間の場合でいふならば）の例を挙げやう。第一は「共喰ひ」の場合である。同一種の動物の間の共喰は變則であつて、人力によつて狭き所に檻禁せられたる動物の外、自然には殆んど無く、今日までに野生狀態で之をやる事が確實に知られてゐるものは狼と鰐の二類だけである。其他の俗にいふ猛獸、即ち獅子、虎、鵂を始め、鷹、蛇などにも決して無いといはれて居る。カマキリの雌は交尾して體を接する中に雄の頭を喰ひ始めることがあるが、此反射的行動は、交尾後廢物である可き雄の體肉を食物として利用し、エナジーの基とするのであらう。動物界には屢此種の節約方針が見られる。交尾後蜜蜂の雄が職蟻によつて殺されるのも食糧の節約である。先の狼と鰐の場合は果して、どうであるか茲に確言し難いが、鰐の棲むやうな熱帶地方は肉食動物が兎角食物の不足を訴へ勝な地方で、そのためにハイエナ、マラ

プ、又は或禿鷹の如くに、腐敗した死屍を喰ふ習性さへも現はれて居る位であるから、食糧問題の解決方法として共喰といふ變則なやり方が起ることは不思議でない。狼の場合でも多くは半砂漠の廣原とか、西比利亞の雪野とか大抵食物の不足を告ぐる地方が多い。要するに食物の潤澤なる地方に於て同種間に共喰の行はるゝことは絶無といふ可きである。

動物の雄が授精を遂げんが爲めにする雌に向つて執る行動に一見暴力を振ふが如くに見ゆるものが頗多い。モグラ類は地中の坑道の行詰りに雌を追ひ込んで交尾を強ゆる性がある。鴨では背に乗る雄のために沈められて溺死する雌が少くない程に雄の挑み方が亂暴である。或蟹の雄が有つ巨大なる缺の用途は雌を捕へて放さぬ爲めだといはれる。其他諸綱目の動物に異性の體を把持して逃さぬ様にする附屬器がある。然し是等は恰かも花粉の授受に便なる構造を有つ植物の場合の如く、種各自の永續を目的としたる形態であり、本能であるから、人類が本來の目的以外の情慾に驅られ、不自然なることをする場合と比較す可きものではないが、世間では屢之を罪惡の内に數へる。

ダーウインが雌雄淘汰説の根據とする爲めに蒐集して以來、世人が熟知するやうになつたことであるが、平時は一向沒交渉に行動する動物の雄同志が、蕃殖期に入つて頻りに鬭争を爲すことがある。然し之は人間のやる喧嘩に比すべきものでなく、體の生理狀態に基づく演劇様の行動で

あること、曾て本誌上で説明した通りである。象や鹿が此時期に狂暴となるが人類に見る月經時の犯罪の如く生理的に起るものである。又群集性動物には指揮者を決定するための決闘がある。北氷洋に近き小島に上陸する海獣の雄は、水際なるべく出入に便利な位置を爭奪するため、及び後れて來着する雌を爭ふために激しい闘争をなし、負傷流血を見ることがあるが、然しこれ等の場合と雖も、爲めに落命者を生ずることは極々稀であり、一度勝負が決すればそれ以後紛争は生じないものである。

同一種の他の個體を殺傷する動物が野生自然の状態に於ては甚稀であること前述の通りであるが、茲に一つ不思議な報告がある。それはナンセンが北極探險旅行の途次フランチ、ヨセフ群島で、一頭の白熊が魚を捕へて食はんとする際に附近を通りかつた小形の白熊を二頭まで噛み殺すのを望見したといふ報告である。紐育動物園長ホナデーは白熊が(後述参照)動物園内で不意に仲間を噛み殺す事實から推して、此報告を信用して居るが、私はナンセンの此觀察が、果して野生動物の習性に關して、かく重大なる問題の決定を左右するといふ場合、責任を以て保證せられ得るか疑なきを得ない。單に他の者を追ひ拂ふことは兎も角、同種の動物をそう無雜作に噛み殺したといふのは大分素人臭い話である。

第二に、同じく肉食獸の間に、別に空腹でもない時に多量の餌動物を噛み殺す場合がある。例

へば狼やテン、イタチの類では、そこに在り合すだけの小獣や鳥を一時に皆斃さうとする奇性がある。野犬が羊の牧場を襲ひ、一夜に百頭以上の羊を噛み殺し、若し一夜にして盡きざれば連夜襲ひ來るといふ恐る可き事實がある。何故にかゝる亂暴をするか、今日の處不明であるが、或ものでは食物貯藏の習性と關係あるかも知れぬ。此考の根據は、狐が雞を盗むときに一羽を持ち歸つて巢の近傍に隠し置き、直ぐ様引き返して次の一羽を運び、隠しては運び、隠しては運び、夜の明ける迄繰返すことがある。又北極に近き地方では狼が餌物を岩陰に隠すことが知られてゐる。若し此運搬貯藏の性質が退化して狩獵の本能だけが殘存すれば、右の如きものとなる筈である。

空腹でもないのに他種の動物を殺すことは、肉食動物の間には、前述の例以外に少しく見られることである。體長二十尺もある大蛇 *Regal python* は他種の蛇を絞め殺して置き乍ら、食はすに放置することがあるといはれる。大西洋にある *Sword fish* と呼ばるゝ大魚は平常は他の魚類を食としてゐるが、稀に鯨を襲うて殺すと報せられる。然し此等が果して世人のいふ如く「なすともよき殺害」「贅澤なる狩獵」であるか、頗る疑はしい。間接的に自種の保存に必要な事情があるのかも知れぬ。時には又狩獵の練習として幼期に現はれる遊戲本能の殘存であることもあらう。例へば猫が鼠を捕へて玩弄する場合の如きである。世間では人間の場合から想像して、よ

く動物が愚半分に他の動物を殺したり、飼主に反抗したりすることがあるやうに考へるが、猿犬又は馬の如き智能の高い高等動物の場合を除けば、それは人間の「買ひ被り」であるらしい。遊戯的行動を以て自ら慰め得る者は餘程進んだ心の持主でなければならぬ。

或狡猾な動物が自分を苦しめた人間に對し、「當りがけ」や復仇をするといふことも、普く世人に信ぜられて居る。仕立屋の店先で鼻の皮膚を針で突かれた象が、次回に泥水を吹かけて仕返をしたといふ話は有名なものである。米國では、Wolverine といふ肉食獸の一種が、Trapper (ワナを用ひて毛皮獸を捕ふる職業獵者) の小屋にその不在中に侵入して、室内の器物全體を滅茶々に打壊し、食物を床上にまき散らして去るといふことが信ぜられてゐる。此兩種は共に中々賢い獸ではあるが、然しかういふ話は本稿の劈頭に説明した通り、何處までが眞實であるか疑はしいので、實は取扱に困るのである。この外昆蟲が吾々の蔬菜を食ふ際に、意地の悪い食ひ方をするといふやうな話は、全然間違である。唯極記憶力の強い高等動物で、前回苦しめられた相手に次回に敵意を持つこと位は條件反射としてでもあり得ることである。

以上述べた通り、一種の動物が食餌としてでなく他種の動物を理不盡に壓迫したり、殺傷したりすることは、皆無ではないが、左様な無目的の行動は全動物界に探し求めて僅に一二の例を発見する程度であり、決して吾人の考へる程多いものではない。而してそれが専ら肉食動物に關係

することは、何か狩獵其他食物を發見する行動から退化したものゝ如くに思はれる。哺乳類の中でも有蹄類以下の各目では一種が他種の生活を妨害することすら絶無といふべく、山羊と羊との野生種は共に高山にあつて、屢接觸するが一が他を逐ふことは全くない。象は絶大なる力を有つけれども、他の有蹄類を壓迫することは知られてゐない。

第三には群集生活を爲す動物の中、その群から放逐せられた獨棲者に間々兇惡なる個體を見ることがある。象の場合がその好例である。元來人間以外の動物と雖もその性癖に個體的變異のあるのが當然であるから、恰かも人間の場合と同様に性來偏狹なるために一群より疎外せられ、疎外せられたるが爲め後天的に一層狂暴となるのではあるまいか。

第四には動物園の如き狹隘なる所に檻禁せられた場合に限つて見らるゝ不自然なる種々の習性がある。野生にあつては別に喧嘩せぬ同種を二匹一所に置けば必ず争つたり共喰したりするものがある、中には雌雄の同棲を拒否し、若し強いで一所にすれば直ちに噛み殺すもの、産んだ子を母自身が噛み殺すもの等がある。人間に幼兒を見られたる際に殺したり、育児を中止したりするのもある。鳥でもカケス、カモメ等、他の鳥を害するので獨檻に入れねばならぬものが多い。動物園の監理者が野生動物の産兒に成功すれば大得意である。寒地の養狐業を發明したのも此點が最大難關であつた。即ち自然の狀態に於て滞りなく行はるゝ蕃殖作用が、檻禁の狀態に於ては正

常に行はれないのが通則である。之には自由の拘束、運動不足、食物の過不足及び異常、不斷の恐怖不安等彼等の體の生理作用を變則ならしむる事情が澤山備はつて居ることに原因する。而して此ことは家畜家禽に於ても同様で、家鼠が共喰をやつたり、一年に六回も子を産んだりする様になつたのは、その一例である。飼育は檻禁よりは幾分廣い所に收容してあるが、それでも野生の時に比すれば餘程不自然の狀況を免れず、然かも此方では代又代を重ねて其狀況を繰返すのであるから、却つてその影響を強く受けることになるであらう。

第五には最も兇暴なる犯罪で、若し人間の場合であつたらば、忘恩者とか信愛を裏切る者とかの惡名を冠せらる可きものである。即ち有蹄類の家畜で牛や鹿の類に數ヶ月若しく數年間愛護を受けた飼主に見る可き程の原因なくして突然突きかゝり殺傷する事がある。飼牛や飼鹿に殺された人の例は世界各地に決して珍らしい事ではない。雄鹿又は雄の羚羊が何等の前兆もなく一夜の中に永く同棲した雌を突き殺すことが、外國の動物園等で間々あつて、時には我子を抱ける雌をさへ暗殺することがある。肉食動物ではかういふ陰險な殺し方は極稀で、獅子、虎、豹、熊、鷲、鷹をはじめ、嫌なものは始めから嫌で、暫時仲よくして居ながら夜間に暗殺するといふやり方は決してしないが、唯白熊のみは例外で、之には永年手にかけて愛育してやつて居る飼主でも、決して油斷は出來ぬさうである。

この甚だ奇怪なる、忘恩背信といふべき犯罪は、牛鹿又は白熊が果して野生の状態に於ても之をなしつゝあるか否か、判定するに困難であるが、現今の處は畜養せられた場合にのみ確實に知られて居る。動物界一般の法則たる種の保存といふ合目的性から推論すれば恐らく自然の状態に於ては無いことであらう。而して右の如き極少數の哺乳類に限つて、こんな奇異なる習癖の存することは如何なる理由であるかといふと、水牛、牛、鹿または白熊は同類中では比較的智能の劣つた動物で、物に恐怖し易く、何でも無いことに暴れる可能性が強い。西班牙の闘牛も馬や犬では到底出来ないことである。かういふ風に智能が発達して居るけれども幾分低能なる動物が、永く不自然なる狀況に畜養せられ、一層精神作用に缺陷を生ずるさせば、丁度低能なる人間が僅かの思ひ違で突飛な悪事をなすことがある様に、前記の殺傷罪を犯すことは、如何にも有りさうに考へられる。

同じく飼主の親愛を裏切る場合ではあるが、乗馬者が我馬に嚙まれたり、曲馬師が獅子、虎又は猿等で怪我をするのは、彼等の恐怖とか、誤解とか云ふよりも、吾々が平素彼等を食物等で釣つて強いて作つた習癖が、急に「より」が戻つたのか、或は食物を遅く與へたとか、鞭打ち方が多過ぎたといふ様な原因がある。豹の如きは最初から教育不可能であつて、そんな習癖を作る望が無いが、斯様な獸類が人類に危害を及ぼす場合は、餘程人類のなす傷害（特に一時の怒に激し

てするもの)に似たところがあり、鹿がその妻を暗殺する如き不條理なるものは趣を異にして居る。

六 自己生存の必要以外の「善行」

動物界の道德的行爲として世間で例に引かるゝものは、親が子を愛すること、雌雄仲よきこと、群集性動物が全群の秩序を保ち各自の職分を守ること等が最普通なるものである。然し乍ら等は前に説明した如く、事實はその種の蕃殖永續を目的としての適應性に外ならぬので、植物の苞が花を包み、果實の硬皮が胚種を保護する「親切」と五十歩百歩のことである。次に寄生蟲の宿主から態々組織が新生して蟲體を保護したり、ウグヒスが苦心してホトトギスの雛を育てるのは自己保存といふ方面から矛盾する如く見ゆるが、此場合は自然界の適應性が偶々二種以上の生物を一組として進化發達した爲めで、恰かも蟲媒花をつくる植物と蜜を吸ふ昆蟲とが一組として、或は桑といふ植物と蠶といふ動物とが一組として適應性を進化し來つたのと同筆法であるから、之を以て甲の乙に對する善行とはいひ難い。

然らば右の如く適應性として運命づけられたる相互關係以外に、一種の動物が偶然他種の動物の爲めに働くことがあるであらうか、換言すれば元來單獨個々に生活する個體が自然界の相互關

係以外に或他の個體のために親切を盡すことがあるかといふ問題に達するが、これは事實上甚だ稀有のことである。既に度々説明した通りに、或種の鳥獸の遺孤を他種の親が養つたといふやうな話は、餘程疑はしい。鳥は頗る低能なもので抱卵育雛の本能はその殆んど全部が反射的行動であるから、誤謬が生するのである。鶏が雛や雉の雛を育てたり、ジウシマツが他の小鳥の卵を温めたりするけれども、之は本能の間違であり、野生の鳥ではそんな行違は少いのが通則である。亞米利加に棲む食肉類に Puma といふ一種がある。獅子虎に近く、豹よりは大なる猫屬の動物で、北米南部の各州では牧場の馬を襲うて牧畜業者を困らせる獸であるが、曾て或亞米利加印度人の部落で、一種の迷信から一人の少女を無人の荒野に遺棄して野獸の餌とすることになつた時に、夕刻から一頭の Puma が現はれて、此少女の傍に立ち、他の野獸が近づき來るのを威嚇して追ひ散らし、徹宵此少女の身邊を保護し、夜が明けると共に何處へか立去つた。翌朝死骸を見んとして集り來つた土人達は少女の救はれた奇蹟を見て、その無罪を信じ所刑を斷念したといふ話が傳へられて居る。若し事實とすれば一寸考ふ可き事であるが、比較的賢い筈の此類の獸がまさか人間の子を自分の子と間違るわけもなからうし、さりとて憐愍の情から保護したらうといふ説も疑はしい。或は他獸と此好餌を爭ふ内に自ら食ふ機會を得なかつたのかも知れぬ。

然し茲に眞の善行といふべきものがある。それは永年愛護の恩を忘れて飼主に危害を加ふる家

畜と正反對に、よく飼主の家族や所持品を覚えて親愛の情を表はす動物の場合である。棘を抜いて貰つた力士を噛まなかつた獅子の昔話は別としても、馬犬などで出處の確實な例が幾らもある。飼主から教へられた仕事を忠實に勤めて自らの命を賭して主人を援け、危険を冒して人命を救助したり、盜賊や刺客と闘つた忠犬の話が、何處の國にも少くない。古くはベスピアス噴火に埋つたヘルキュラムムの町から發掘せられた犬の骨骼に、その配置から見ても、十餘歳の一少年を體を以て被ふやうにして死んだのがあつたが、その頸輪に刻まれたる文字から、此犬は其名を Delta と呼び、曾て三人の人命を救ひ、五回盜賊を防いだ經歷から、此幼主の保護に附けられたものであることが解つた。アルプス山中サン、ベルナル僧院の犬が雪中行歩に悩む旅客を救ふた話は有名なものであるが、其中の一匹 Barry と呼ばれた犬は、種々巧妙なる方法で四十人の旅客を救ひ、或時は雪上に倒れた小兒を介抱して意識の恢復するを待ち、雪を掘つて體を小兒の下に入れ、かつぎ上げる如くにして彼を背に載せ、僧院に運び歸つたさうである。然も此犬は四十一人目の旅人が狼と誤認して殺してしまつたのであつた。曾て北米の或山上の寂しい小屋に獨棲してゐた牧羊者の老翁が急死したときに、彼の二匹の飼犬は、里人が此老翁の死を知るまでの間、毎日朝は羊を逐うて牧場に、夕は又羊を纏めて羊の小屋に送り届けたことがあつた。又過般の世界大戰の際、聯合軍の側では、殆んど世界中のあらゆる品種の犬を、總數一萬匹を超ゆる位

使用したが、見張、傳令、失踪者の搜索等は元より、或ものは熱いスープの罐を頸にかけて運搬し、或ものは砲彈破裂のために半ば埋もれたる將校を掘り起して、味方に救助せらるゝまで三日間その傍を去らなかつた。特に *Grey* と名づけられた羊飼犬は百人の佛兵の命を救つて高級の勳章を授けられたといふことである。大和伊勢あたりで車の先引に用ゐられる犬を見ても如何に彼等が忠實であるか解るが、是等こそ眞の善行で、人間の場合と異らぬものである。

然しかくの如き動物界最高度の道德行爲を示し得る動物は、犬の如く非常に伶俐で、よく物を覺へ、然かも家畜として人類との共同生活に慣れ切つたもの換言すれば野生狀態との差異による不便を苦にせぬまでに進化したる場合に限られて居り、野生自然の狀態にある動物では到底見られぬ現象である。此事は眞の博愛とか謝恩とかの善行が、智力最も著るしく發達したる家畜に人類の道德的習慣が植えつけられ、飼主の性格が彼等に力強く反映することによりてのみ起り得ることを示すのである。私は曩きに兇惡なる犯罪が専ら家畜によりてなさるゝことを述べたが、此種犯罪の場合にあつては、賢いとはいふものゝ、（全然學習力のない馬鹿な動物は家畜となり得ないものであるが）、比較的低能なる牛鹿等がその智能の發達に缺陷があるために起る行違が主因であるらしく、之に反し善行の場合には、最も賢い動物の心が長期間の練磨を経て完全なる發達を遂ぐるることによつて初めて出來るのである。

七 人類に於ける道德の起源

野生の狼やテン、イタチが食物としての必要以上に他の動物を殺したり、玩弄したりすることから、彼等に一種の犯罪本能 (Criminal instinct) なるものを假定し、飼牛の忘恩、白熊の不信などをば、此本能が飼育の爲に一層強く現はるゝものと説明する學者もあるが、私は前者は狩獵貯藏の本能の退化したもの、後者は環境の不自然なるによる智能の不調和と解釋し得る點から之、を正常なる犯罪本能と呼ぶことを躊躇する。

一體罪惡といふ語の定義が不明瞭である。吾々人間の場合でも同一の行爲が周圍の状況如何により善ともなり、惡ともなるのである。若し假りに寄生蟲やホトトギスのやうに、一種の生物が他種の生物の勞作結果を横取りすることが罪惡であるならば、牛馬が草を食ふことも亦罪惡と云はねばならぬが斯様な定義の無理なることは既に説明した。各種の生物個々を中心として考へれば、その種の永續繁榮を目的とする行動は、如何程他種に迷惑であつても、寧ろ善行である。若し一步を譲つて、自己の生存に必要なならざる行動にして他種に迷惑を及ぼすものを罪惡と呼ぶことゝすれば、今日までに知られたる範圍に於て、それは本能の錯誤若しくは低能者の狂態が主で、人間の如くに利害を打算してする惡事は動物界には無い。

下等の動物から高等の動物に亘り、自己を犠牲にしてまで他を援けやうとする、一種の遠い起源をもつ本能があるといふ考も、前と同理によつて否定せられねばならぬ。群棲性動物の協同性本能を見て之を高等動物の家畜などが飼主を慕ふ知的行動と同性質のものと誤解して作り出した玉石混交の論が即ち「相互扶助の原則」である。

以上動物界一般に於ける道德の比較考察は同時に、人類に於ける道德心の起源を論する上に有力なる参考資料を提供するものである。勿論此問題は中々複雑な關係にあつて、既に多くの哲學者心理學者の議論があるであらうから、眞に此問題を討究し得る者は、それ等を充分に學んだ人でなければならぬ。唯私が盲蛇に怖ぢざる譬喩の如く、敢て卑見を茲に附言する理由は、從來なされたとは全く別途の動物學の方面から考察することが、多少利益となるだらうとの考からである。

抑も人類は最初森林次で原野の中の野生状態から徐々に今日の社會的生活に移つたものであつて、畜養動物が受けなければならぬ若干の不自然なる状況を頗る永く經て居ることは否み得ない。従つて、曩に述べた家畜に於て特に強く現はるゝを原則とするところの精神的不調和を、その天性に持つことは可能である。事實上兇惡なる發狂者を突然に生ずることは人間に於て他の何れの動物よりも多い。然し乍ら之は嚴密に云へば、正常の人間でなくして例外の病者、狂人であ

る。恰かも總ての牛が飼主を突くのでなく、總ての鹿が妻を暗殺するのではないと同様である。私は正常なる人間の天性に或犯罪本能を確認することには同意し得ない。唯個體的變異として、(健病の差は到底之を明瞭に定義することは出来ぬから、一括してかく云ふ方が便利である)犯罪衝動を發し易い者はあり得ると思ふ。

然らば善事善行をなす如き衝動も亦同様に人間の天性中に備はつて居り、個體的變異を以て厚薄を示すのかといふと、私はこの天性といふ字の意味次第で然りとも否とも語へ得ると思ふ。人類は蜜蜂や白蟻の如く絶對的に社會生活を爲す可き性質を賦與せられて居らず、血縁なき他人の爲めに自己を犠牲とする如き本能が存在する理由が無い。即ち此意味では利他的天性は少くも無いといつてよい。然し乍ら、曾て私が本誌上に人類に於ける愛情の起源を論じたときに詳述した通り、人類には第一、他の動物に其比を求め得ざる程完全なる家族生活をなす可く運命づけられてゐる。それは子供の養育に對して甚だ長い兩親の努力を必要とすることに起因して居る。第二、智能發達に便利なる腦髓は常に一事を他事と聯絡する傾向があるために、右の家族の者に對する感情が容易に他の人類若しくは動植物、或は更に無生物迄も擴張せられ、或は日常目撃する他人の行爲が自己の感情と聯合し、善行を快とし親愛を樂しむの情となり得る。第三、與へらるゝ教育のために、所謂物心つく頃よりして己れの爲したる行動の結果の利不利を辨別し、人を喜

ばし人に賞められることを選んで爲す習慣を生ずる。此三つの状況に基づいて、人間が生れ落つる之間もなく赴き初めるこの良好なる傾向は、嚴密に云へば半ば以上後天的變化であるけれども、夫を導き行くところの主原因が先天的であるから、此傾向が恰かも先天性の展開の如くに見える。若し天性といふ字を「大多數の個體に表はるゝもの」といふ意味に用ふるとすれば、人類の愛他心を指して天性と稱するも亦妨げないのである。然し乍らそれは嚴密に云へば何處までも後天的變化であるから、必然的ではない。不幸にして若し他人を虐げ、惡事を爲すことの方が偶然その人間の快感とか營利心とかに結合することになれば、其結果は前とは反對に、利己排他的の性格を生じ、必ずしも親愛の情を作り上げない。或は折角幼時に作られたる後者を再び打消してしまふ。従つて遂に破廉耻なる性格を生ずる。之は前に述べた、狂人のもつ兇惡性とは別の、正常人の兇惡性である。勿論兩者の區別は時に甚だ困難であり、前者が原因で後者を發することも決して稀でないけれども、犯罪學を論ずるものは、その區別を知らねばならぬ。

全動物界を見渡しても、人間程悪い事をする動物は外に無い。而して中々深く企んだ場合の多いのは勿論、智能の偉大なる發達に原因して居るので、動物性を多量に有つからだといふ考は全然誤りである。動物性が多量にあつたらば、人間には病者狂人の外には惡事をなす者が寧ろ少い筈である。

現代の人類をして罪人たらしめ易い根本の事情は、我々の社會生活が不自然であることに起因する。例へば蜜蜂の如く自然より社會生活をなすべき性質を與へられてそれを爲し居る動物では、個員の天性の内に社會の利益を本位としたる台目的性を有つて居るが、人間は元來家族的生活をなす可く運命づけられてゐるものが、愛情の擴張と利害打算とから、二次的に社會生活に轉じてゐるのであるから、その天性中家族生活のためのものは澤山あるが、社會生活のためのものは殆んどない。従つて後者は後天的に養成せられねばならぬ。人間の社會に於て常に、個人の利益と社會の利益とが衝突し、然かも、人情としては前者を欲するに、公益として後者を重複せなければならぬ矛盾の眞因は實に茲に存するのである。斯くの如き事情の下では、性來少しく腦髓に異常ある者、又は少しく後天的教養の不足なる者が、直に社會の利益を捨て、個人の利益を取ることは、實に當然過ぎることである。繰返していふが家族人としての人間性は大部分先天的に與へられてゐるが、社會人としての人間性は大部分之を後天的に作らしめねばならぬ。

然し幸にして人間には利他的、博愛的性格を生じ易き事情が備はつて居る。勿論家畜の如き不自然生活の影響により、若しくは智能の複雑性が進んだ結果により偏狂な個體的變異の出る可能性も増してはゐるけれども、大體正常人であれば親子兄弟の愛が直に家族外のものに對する愛に擴張せられるやうに出來てゐる。他を苦しめることが、聯想からしても自體に苦痛と感ぜられる

ことは、倖に人性を（後天的ではあるが殆んど必然的に）次第に社會生活に適する様に善導することとなる。然しそれに絶對的必然性はない。

最後に一言すべきは、動物界に於ける「善行」「惡行」が人心に及ぼす影響である。私が理論的に道德的批判を無意味なりとしたる「生活に必要な適應性善行」と雖も、事實に於ては兒童の心理に有力なる感化を與へる。一般人には動物界の育兒も協同も皆、良心を以て爲されるが如くに感ぜしめる。而して幸にして動物界には「善行」が多くて「惡事」が稀である。人間の様な惡黨は無い。我子を育てるにホトトギスの如きことをなすものは極少い。従つて自然を見ることが如何程兒童の道德觀を作り上げるに役立つて居るか測り難いのである。夫故教育の上に於ては、やはり、寄生生活は卑劣で、食物の掠奪は惡むべき行爲、雄の頭を食ふカマキリの雌は許すべからざる大罪人と見做して置かねばならぬ。私が本稿で述べたやうな理論は、初中等の學生に向つては不必要である。

（完）